国外流出資料の発掘と中国学の新たな展開
――イベリア半島における漢籍調査をもとにして――

井上泰山

近年、中国において、中国と西欧諸国との文化交流の歴史を改めて問い直す試みがなされつつある。その成果の一部は、例えば、張西平・方鳴主編に係る東方出版社の『中国與欧州早期宗教和哲学交流史』(二〇〇一)、あるいは、大象出版社の「海外漢学研究叢書」に収められている『傳教士與法国早期漢学』(二〇〇三)、同じく大象出版社の「中外関係史叢書」に収められている『中国與西班牙関係史』(二〇〇三)などによって窺い知ることができ、いずれも中西文化交流史上の個別具体的な問題を解き明かしている。ただ、これら一連の労作を手にして遺憾に思うのは、明清時代を通じて西欧諸国にもたらされた中国の書籍がいったいどのくらいの量にのぼるのか、という基本的な事実を確認することの重要性について、確かな認識が確立されていないように見受けられることである。西欧諸国に流入した漢籍の総量を把握することは、西欧における漢学発達史や東西交流史に関する様々な問題を究明する上で必須の前提条件となるだけでなく、そこに、わが国における今後の中国学が取り組むべき課題に対するヒントも隠されているように思われる。

一方、日本においても、前世紀以来、こうした問題に着目し調査を行った研究者は少なからず存在している。戦前から戦後にかけて出版された石田幹之助の著作や榎一雄の著作群は当時の情勢が許す範囲内で、最大限、この問題に挑んだ貴重な成果である。この流れは近年に到るまで継続しており、個別散発的にではあるものの、西欧における漢

学研究史及び漢籍の収蔵状況に関する情報は次第に公開される方向に進みつつある。以下、管見の及ぶ範囲でそれらの一部を挙げれば、近年の成果として、まず、梅村坦・斯波義信・高田時雄・森安孝夫の四氏による座談会の形で西欧諸国全般における東洋学の歴史を回顧したものとして、高田時雄氏の編集に係る『東洋学の系譜（欧米篇）』（大修館書店、一九九六）がある。

個別の国における東洋学研究の状況、あるいは各機関における所蔵漢籍の情報を伝える一連の報告も徐々に公開され始めている。まず、中国学に関する最も長い伝統を有するフランスに関しては、福井文雅氏や興膳宏氏、あるいは坂出祥伸氏による東洋学研究の近況に関する報告があり、また、フランスと並んで長い中国研究の伝統をもつオランダの状況に関しては、村松祐次氏の報告やライデン大学漢学研究院の呉栄子氏の報告が備わっている。

イギリスやイタリアにおける漢籍の現存状況を伝える貴重な報告もなされつつある。イギリスに関しては、七〇年代から八〇年代にかけて発表された村山吉廣氏の一連の報告や、坂出祥伸氏の報告、あるいは近年の成果として、森瀬壽三氏によるケンブリッジ大学所蔵に係る旧ウエードコレクションについての調査報告などがあり、有益な情報源となっている。また、イタリアにおける漢学の発達と漢籍の収蔵状況については、今世紀に入って、高田時雄氏の調査報告が相継いで公表され、従来明らかにされることのなかったイタリア各地の図書館における漢籍の状況が次第に明らかになりつつある。「イタリア所在漢籍連合目録」の公刊が待たれるところである。

その他、ドイツやロシア国内の漢籍の収蔵状況に関しても、その一部は、坂出祥伸氏や金岡照光氏の報告によって窺い知ることができるようになった。なお、以上に述べた各報告の具体的な論題及び掲載誌等については、坂出祥伸氏の『東西シノロジー事情』（東方書店、一九九四）を参照されたい。

このように見てくると、西欧諸国における漢学研究史及び漢籍の収蔵状況に関しては、次第に個別の詳細な情報が

蓄積されつつあるように感じられるものの、ヨーロッパの西端に位置するスペインやポルトガル、乃ちイベリア半島の状況については、いまだに充分な調査は行われておらず、最も情報の乏しい地域であるといえる。勿論、この地域における漢籍収蔵調査を行った人物が全くいなかったわけではなく、フランスのペリオや中国の戴望舒、あるいは台湾の方豪やわが国の榎一雄などが戦前から戦後にかけて一時的に調査に赴いてはいるものの、残念ながら、当時の様々な制約に阻まれて充分に調査が行き届かなかった側面もあるように思われる。

このような状況の中、筆者は、勤務先である関西大学から、二〇〇五年度前期在外研究員の資格を与えられ、四月から九月までの半年間にわたって、イベリア半島各地の修道院や宮殿の図書館あるいは公共図書館等に収蔵されている漢籍の調査を行い、一定の成果を得ることができた。調査のために訪れた機関は、スペインでは一四、ポルトガルでは八、合計二二の機関に及ぶが、今回は、それらのうち、質量ともに重要な位置を占めると判断されるマドリッド及びその近郊の二つの都市にある四つの機関、乃ち、（1）スペイン国立図書館、（2）トレド聖堂参事会図書館、（3）エスコリアル修道院図書館、（4）マドリッド王宮王室図書館、における漢籍の収蔵状況と流入の経緯について、調査の概要を報告し、併せて、日本の中国学が今後取り組むべき課題について、若干の私見を述べてみたい。

（1）スペイン国立図書館の漢籍

同館には合計七〇種類の中国関連書籍が現存する。その殆ど全ては、清代以降に刊行されたものであるが、中には刊行年のはっきりしないものがあり、明代の刊本が含まれている可能性もある。収蔵されている漢籍の中で比較的刊行年が古いものとしては、芥子園蔵板の『本草綱目』（本稿末尾付載「スペイン国内四機関現存中国関係書籍目録」

14参照、以下同）や、汲古閣蔵板の『説文解字』（目録15）、あるいは、佐聖堂蔵板の『篆字彙』（目録20）などがある。その他、刊行年の異なる各種の『康熙字典』（目録23、24）や科挙受験用の参考書と思われる四書五経の解説書（目録33、37、39～43）などが多く含まれている。

スペイン国立図書館所蔵漢籍の特徴としてもう一つ指摘しなければならないのは、そこに一〇種類の中国近世白話小説が含まれていることである。書名を列挙すれば、『西遊真詮』（目録21）、『繡像第五才子書』（目録26）、『説岳全傳』（目録45）、『飛龍傳』（目録46）、『好逑傳』（目録47）、『雷峯塔』（目録48）、『繡像第一才子書』（目録49）、『繡像龍圖公案』（目録50）、『繡像今古奇觀』（目録88）、『繡像第三才子書』（目録89）などである。これらの白話小説はいずれも著名なものばかりであり、その意味では特に珍本とは言えないが、書肆に注目してみると、中には、「敬業堂蔵板」（目録46）や「禅山會文堂蔵板」（目録88）など、これまであまり知られていなかった珍しい版本も含まれており、その意味では、今後詳細に調査すべき貴重な書物であると考えられる。

以上の他にも、コボ（Fray Huan Cobo）が著した『LIBRO CHINO』（目録8）や、アモイもしくはマレーシアで印刷されたと思われるキリスト教関係の書物、例えば『聖書』（目録84）、『主經體味』（目録85）、『尊主聖範』（目録86）などもあり、この点もスペイン国立図書館の中国関連書籍の中では貴重なものとなっている。

ただ、残念なことに、同図書館に現存する七〇点の漢籍及び関連書籍については、それが、いつ頃、いかなる経緯によって収蔵されるに至ったか、という問題に関する情報は何も得られていない。同図書館で複数の司書に問い合わせてみたものの、有力な情報は何一つ得られなかった。ただ、後に述べるトレド聖堂参事会図書館で得た情報を勘案する限りでは、かつてトレドにあった漢籍の一部が第一共和制の時期にスペイン国立図書館に移管されたことは確かであり、書籍の特定は困難であるものの、それはいまだに同図書館の蔵書を形成しているらしい。

なお、同図書館の収蔵漢籍については、既に『関西大学中国文学会紀要』第二七号（二〇〇六）誌上に「スペイン国立図書館所蔵漢籍目録（古典の部）」と題する報告を掲載したので、具体的な書名と書誌については、そちらを参照されたい。

（2）トレド聖堂参事会図書館の漢籍

調査の結果、同図書館には現在六点の漢籍類が保管されていることが判明した。それらの書名を、抄写又は刊行年とともに示せば、およそ以下のとおりである。

一『大方廣佛華嚴經』一三四五年抄本（目録1）
二『少微先生高明大字資治通鑒節要』明刊本？（目録91）
三『明解増和千家詩集』一五七四年刊本（目録6）
四『新鐫梅竹蘭菊四譜』一六二〇年刊本（目録11）
五『妄推吉凶辯』一六六九年刊本（目録16）
六『坤輿圖説』一六七四年刊本（目録18）

既に明らかなように、六点のうちの四点までが明代以前の抄写又は刊行に係るものと推定される。先述のスペイン国立図書館の蔵書と較べると、収蔵点数こそ少ないものの、刊行年代が相当に古く、特に、一の抄本『大方廣佛華嚴經』及び三の刊本『明解増和千家詩集』は、これまで存在が知られていなかった稀覯本である可能性が高い。なお、後者に関しては、『汲古』第四九号（二〇〇六）誌上に「トレド聖堂参事会図書館蔵『千家詩』（万暦刊本残巻）につ

いて」と題する小論を掲載し、北京図書館所蔵本との比較を通じて版本史上の価値を検討した。

ここで、以上六点の漢籍がトレド聖堂参事会図書館に流入した経緯について、簡単に触れておくことにする。結論から言えば、これら六点の漢籍はいずれも、かつて一八世紀後半にヴァチカンの司書を勤めたセラーダ枢機卿の私有に係るものであり、晩年になって同図書館に寄贈された書籍の一部である。F.J.ルイスの『スペイン教会史事典』（一九七五）によれば、セラーダ枢機卿はスペイン人の血を引く人物であり、一八世紀のイタリアにおいてピオ六世の副大臣として活躍し、同時に、ヴァチカンの図書館の発展にも貢献した。稀代の蒐集家としても有名であり、書籍の他にも様々な骨董品や貨幣などを収集していたとされる。「スペイン人の血を引く」が故の所作であろうが、氏の意思により、晩年の一七九八年から一七九九年にかけて、蔵書の一部がトレド聖堂参事会図書館に寄贈された。その際、書物の見返しのページに、氏の寄贈であることを示す「Zelada」の文字が刻まれたことが記録に残っている。実際に調査した結果、上記六点の漢籍には今なおその文字がはっきりと残されており、確かに同氏が寄贈した書物であることを確認することができる。

以上、トレド聖堂参事会図書館に一八世紀末以来保管され続けている六点の漢籍について、その概要を簡単に紹介した。同図書館の蔵書に関する、より詳細な情報に関しては、『関西大学文学論集』第五六巻第二号（二〇〇六）誌上に「トレド聖堂参事会図書館の蔵書について」と題する報告を載せたので、そちらも併せて参照されたい。

（3）エスコリアル修道院図書館の漢籍

一六世紀にフェリーペ二世によって完成されたエスコリアル宮殿は修道院をも兼ね、王室の図書館もその一部とし

て建造された。当時中国やインドネシア、フィリピンなど、アジア諸国において布教活動に従事していたイエズス会の宣教師たちは、現地から持ち帰った漢籍を国王への献上品として同図書館に寄贈した。それらの漢籍は豪華な装幀を施され、爾来、長く図書館の一室で眠りつづけることになった。

戦前から戦後にかけてエスコリアルを訪れ、修道院図書館所蔵漢籍を調査した人物は多い。フランスのペリオ、中国の戴望舒、台湾の方豪、日本の榎一雄、そして、最近になって、イギリスのファン・デア・ローン（Van Der Loon）、中国の孫崇濤などが相継いで訪れ、収蔵漢籍の状況が次第に明らかになってきた。筆者も一九九五年春に現地に赴き、『三国志通俗演義史伝』を中心とする漢籍調査を行った。その結果、同図書館には、一六世紀にもたらされた漢籍として、以下の六点が存在することが判明した。

一『少微先生高明大字資治通鑒節要』一五四一年刊本（目録3）

二『徐氏家傳捷法鍼灸』一五三一年刊本（目録2）

三『三國志通俗演義史傳』一五四八年刊本（目録4）

四『新刊補訂源流總龜對類大全』（目録92）

五『類編曆法通書大全』（目録93）

六『風月錦囊』一五五三年刊本（目録5）

エスコリアル修道院図書館に収蔵されている以上六点の書物に関する総合的な考察は、孫崇濤氏の近著『風月錦囊考釈』（中華書局、二〇〇〇）においてなされているので、詳細についてはそちらに譲ることにして、ここでは、同図書館で新たに発見された白話文学関連の古版本、乃ち三の『三國志通俗演義史傳』及び六の『風月錦囊』が学界に与えた影響について若干言及しておくことにする。

『三國志通俗演義史傳』については、早くからその存在自体は認識されながらも、詳細に当該版本を調査する人物もなく、長く学界の懸案事項であった。一九九五年春、現地を訪れた筆者は該書のマイクロフィルムを入手して帰国し、関西大学出版部の支援を受けて翻刻出版した。それ以後、日中両国における『三国志演義』の版本に関する研究は飛躍的に進展した。なお、エスコリアル修道院所蔵本を含めた『三国志演義』に関する研究の近況については、二〇〇六年三月に刊行された神戸大学の学術誌『未名』二四号に座談会記録として掲載されているので、そちらを参照されたい。

また、複数の戯曲の選本である重刊本『風月錦囊』に関しては、その刊行が明代嘉靖年間以前に遡りうる可能性を含んでいることから、『元刊雑劇三十種』や成化本『白兎記』に匹敵する重要な発見であると考えられている。これについても、既に孫崇濤・黄仕忠両氏の手に成る箋校本（『風月錦囊箋校』中華書局、二〇〇〇）が出版されたことにより、今後益々研究が進むものと期待される。

（4）マドリッド王宮王室図書館の漢籍

同図書館は、一般には公開されていないが、所定の手続きを行えば、午前中に限って、研究者に対して閲覧が許可される。ただ、同図書館には冊子による書籍目録が備わっていないため、館内においてコンピュータにより検索する他はなく、言語上の障碍に阻まれて、遺憾ながら充分な調査を行うことができなかった。従って、以下に報告する内容は、同館所蔵の全ての漢籍を網羅したものでないことを予め断っておきたい。

調査の結果、同館において四点の漢籍の存在を確認することができた。

一『舞劍集』一六七二年刊本（目録17）
二『易經大全』一七五〇年刊本（目録28）
三『易解』一七五〇年？刊本（目録29）
四『仁安堂四書真本』一七六二年刊本（目録32）

四点共に清代の刊本であり、特に珍本は無いように見受けられるが、これらの他にも、例えば、清代の北京で実際に行われていたと思われる大道芸の様子を描いた線画や、満州族の生活様式を描写したと思しき極彩色の絵画、あるいは、様々な想像上の動物を描いた絵画などもある。

以上、スペイン国内の四つの機関に収蔵されている中国関係書籍の状況について、具体的な書名と簡単な書誌を紹介し、一部の重要な資料に関する若干の解説を試みたが、未だに全体像を解き明かすには至っていない。今後継続して更に詳しく調査を行う必要があるように思われる。

さて、ここで改めて今回の講演の本来の趣旨に立ち返って考えてみると、それは、日本の中国学研究のあり方を外部から俯瞰することによってより鮮明に現状を把握し、然るべき突破口を見出して未来への新たな展望を拓こうとする企画であるように思われる。しかし、筆者が今回報告した内容は、そうした展望を拓くための方法論などではなく、海外に流出した漢籍の調査結果に過ぎない。西欧諸国における漢籍の現存状況と中国学の進展との間に如何なる関連があり得るのか。両者は一見、全く無関係のようにも思われる。しかし、私見によれば、必ずしもそうではない。確かに、西欧諸国に流出した漢籍の総量の把握と日本の中国学が進むべき一つの方向、という問題が、ただちに直截的な意味で結びつくとは思われない。しかし、翻って過去における中国学の進展について考えてみると、新しい

資料の発掘は必ず新たな学問分野を開拓し、その発展を強力に後押ししてきたのも疑いのない事実である。二〇世紀初頭に大量に発見された敦煌文書とその後の敦煌学の飛躍的な発展を持ち出すまでもなく、これまでの中国学研究の進展に対して、新資料の発掘が伴わなかった例はむしろ少ないのではあるまいか。新資料の発掘によってもたらされる新たな学問領域の開拓、これは疑問を差し挟む余地の無い確かな事実であるにもかかわらず、ともすれば、この当然の前提がなおざりにされているきらいはないか。今一度改めて考え直してみるべき時期にきているのではあるまいか。

ところで、本学会において、中国学の未来像を探る今回のような企画が立案されたのは、これが初めてではない。今から一八年前、乃ち一九八八年一〇月、本学会の全国大会が大正大学で開催された。その大会は学会創立四〇周年にあたるということで、五人のパネリストが招かれ、「中国学の未来像」というテーマのもとにシンポジウムが開催された。その席に於て、パネリストの一人であった追手門学院大学の金谷治氏は、次のような発言をされている。

これからの展望を述べるとすれば、まずもって情報の収集と整理ということが重要である。新しいコンピュータの活動が広く必要とされるだろう。新資料の発掘は目ざましく、まだまだ進展の状況がつづいているが、発見された新資料についての研究も数多くの論文として現れている。（中略）そこで、こうした多くの情報をこなしていくのはすでに個人の能力をこえたことであるから、それを集中的に管理して研究者の要請に応えて必要な情報を供給できるような機関を設置するほか、あるいは、多人数の機能分担による共同研究の体制を考えるとかいうことが、いよいよ必要になってくるであろう。（『日本中國學會報』第四十一集、二六二頁）

金谷氏の提言は、あくまでも専門分野である中国古代思想研究の進展状況に関する発言であったが、氏の提言が成された一九八八年といえば、コンピュータによる情報の収集・管理が世の中の各分野に進出し始めた頃である。その

後、氏の予想に違わず、コンピュータによる情報管理は様々な学問分野において必要不可欠のものとなりつつあるが、およそ二〇年を経過した現在もなお、氏の提言は決して色褪せてはいないように思われる。

今や、インターネットは我々の生活の隅々にまで浸透しつつある。学問の世界においても、必要に応じて、瞬時に有益な情報を眼前に届けてくれる便利な手段となりつつある。膨大な漢字文献のデータベースも相次いで完成している。利用の仕方如何によっては、インターネットは人類が開拓した全く新しいタイプの情報伝達及び保存の手段となりうるであろう。ただ、現段階では、人の手によって行うべき重要な作業が、まだ残されている。それは、他でもなく、今回その一部を報告した如く、かつて西欧諸国に流出した漢籍の現物を詳細に調査し、データベースを作成して、それを万人が利用可能な状態にもっていくことである。

既に述べたように、西欧諸国に流出した漢籍の総量は膨大な量にのぼるはずである。それら全てが公開されれば、その中に混入している貴重書や従来発見されることのなかった「天下の孤本」の存在も徐々に明らかにされるであろう。そして、そのことがとりもなおさず、中国学を新たな方向に導いていくきっかけとなるであろう。仮にそうした資料が大量に発掘されれば、これまで存在しなかった全く新しい学問分野が切り開かれる可能性がある。

ここで改めて考えるべきことは、新資料の発掘という課題に対して今われわれに何ができるか、という問題である。現段階では誰もが個別の勤務先を通して海外に赴き、単発的に調査を行っている状態であるが、そうした個人的な作業に頼っていては、早期の全面的な調査は望めない。そこで、敢えて提言すれば、本学会としても、特別の漢籍調査プロジェクトチームを結成して、年次計画的に西欧に流れ出た漢籍所蔵調査に乗り出すくらいの意気込みがあっても好いのではないか。もちろん、そのための独自の予算化も必要となるであろうし、場合によっては、科学研究費などとの連携も視野に入れる必要があろう。そして、将来的には、調査された漢籍の全てのデータベースを日本で構

築管理し、中国はもちろんのこと、全世界に向けてサービスを提供するくらいの気構えがあってもよいのではないか。同時にそれは、日本のハイテク技術を最大限に活用する道でもあると考える。

以上に述べたことは、新資料の調査発掘を前提とした空言のように聞こえるやも知れないが、筆者としては、資料の存在こそが研究の方向を決定づける、と信じて疑わないものであり、新たな理論の構築や研究組織の見直しによる研究力の強化等も、場合によっては大いに必要であるに違いないが、そのどれもが、ひとえに新資料の発掘とも密接に関わっていると考えられるだけに、当面取り組むべき課題の一つとして、西欧各国に散在する漢籍のデータベースをできるだけ早期に構築することの必要性を、この機会を借りて改めて問いかけたく思うのである。

（二〇〇六年一二月二八日補訂）

資料：【スペイン国内四機関現存中国関係書籍目録】

（国）：スペイン国立図書館蔵
（聖）：トレド聖堂参事会図書館蔵
（修）：エスコリアル修道院図書館蔵
（王）：マドリッド王宮王室図書館蔵

1『大方廣佛華嚴經』巻第五十四／一三四五年抄本（聖）
2『徐氏家傳捷法鍼灸』二巻／明徳堂刊／一五三一年刊（修）

3『少微先生高明大字資治通鑑節要』二十巻／張氏新賢堂梓／一五三九年（一五四一年？）刊（修）
4『三國志通俗演義史傳』十巻（殘本・存八巻）／一五四八年刊（修）
5『風月錦囊（？）』二百六十八葉／詹氏進賢堂／一五五三年重刊（修）
6『明解増和千家詩集』三・四巻／金陵王氏廣勒堂梓／一五七四年刊（聖）
7『天主教真傳實録』六十二頁／FrayHuanCobo 著／書肆不詳／一五九三年刊（国）
8『LIBRO CHINO』百五十四頁／FrayHuanCobo 著／書肆不詳／一五九五年（国）
9『交友論』／利瑪竇著／一六〇一年刊（修）
10『二十五言』／利瑪竇著／一六〇四年刊（修）
11『新鐫梅竹蘭菊四譜』集雅齋刊／一六二〇年刊（聖）
12『西學凡』／艾儒略著／一六二三年刊（修）
13『璽言蠡勺』／畢方濟著／一六二四年刊（修）
14『本草綱目』五十二巻／芥子園藏板／一六五七年刊（国）
15『説文解字』六册／汲古閣藏板／一六六四年刊（国）
16『妄推吉凶辯』（殘本）／書肆不詳／一六六九年刊（聖）
17『舞劒集』三巻／崇徳堂／一六七二年刊（王）
18『坤輿圖説』下巻（殘本）／書肆不詳／一六七四年刊（聖）
19『増訂廣輿記』二十四巻／書肆不詳／一六八六年刊（国）
20『篆字彙』六册／佐聖堂藏板／一六九一年刊（国）

21『西遊真詮』二十巻／芥子園藏板／一六九六年刊(国)
22『小學體註大成』六巻／佛山老會堂藏版／一七一三年刊(国)
23『康熙字典』三十二册／一七一六年刊(国)
24『康熙字典』三十三册／一七一六年刊(国)
25『五經圖』六册／一七二四年刊(国)
26『繡像第五才子書』二十册／芥子園藏板／一七三四年刊(国)
27『聖年廣益』八册／首善堂仁愛聖所藏板／一七三八年刊(国)
28『易經大全』二十四巻／一七五〇年刊(王)
29『易解』六册／一七五〇年刊？(王)
30『古玉圖』五巻／亦政堂藏板／一七五二年刊(国)
31『博古圖』／亦政堂藏板／一七五二年刊(国)
32『仁安堂四書真本』／仁安堂／一七六二年刊(王)
33『五經讀本』八册／廣新堂藏板／一七七四年刊(国)
34『古玉圖譜』／康山草堂藏板／一七七九年刊(国)
35『四書章句集註』六册／蔭槐堂藏板／一七七九年刊(国)
36『醫方集解』六册／緯新堂藏板／一七八一年刊(国)
37『易經讀本』七册／緯新堂藏板／一七八四年刊(国)
38『通鑑攬要』十九巻／飛鴻堂藏板／一七八五年刊(国)

39『禮記』五巻／芥子園刊／一七九〇年刊(国)
40『周易』二冊／芥子園刊／一七九〇年刊(国)
41『詩經』八巻／芥子園刊／一七九〇年刊(国)
42『春秋』三十巻／芥子園刊／一七九〇年刊(国)
43『書經』六巻／芥子園刊／一七九〇年刊(国)
44『百美圖』四冊／集腋軒藏板／一七九〇年刊(国)
45『説岳全傳』六巻／福文堂藏板／一八〇一年刊(国)
46『飛龍傳』六巻／敬業堂藏板／一八〇五年刊(国)
47『好逑傳』六巻／福文堂藏板／一八〇六年刊(国)
48『雷峯塔』五巻／玉花堂刊／一八〇六年刊(国)
49『繡像第一才子書』六十巻／福文堂藏板／一八一四年刊(国)
50『繡像龍圖公案』十巻／一經堂梓行／一八一六年刊(国)
51『左傳』八巻／聯墨堂藏板／一八一七年刊(国)
52『圜天圖説續編』五冊／松梅軒藏板／一八二一年刊(国)
53『詳訂古文評註全集』十巻／永聯堂藏板／一八二三年刊(国)
54『康熙字典』三十二冊／一八二七年刊(国)
55『康熙字典』三十二冊／一八二七年刊(国)
56『四子書』六冊／玉山樓藏板／一八二七年刊(国)

57『唐詩合選詳解』十二巻／味經堂藏板／一八三一年刊(国)
58『大清律例會通新纂』三十八巻／一八三二年刊(国)
59『八銘塾鈔』『八銘塾鈔二集』十册／笥經堂藏板／一八三二年刊(国)
60『新増幼學故事尋源』四巻／福文堂書坊刊／一八三三年刊(国)
61『東西洋考每月統紀傳』七册／一八三七年刊(国)
62『日課撮要』二百六十三頁／(原版藏在京都宣武門内始胎大堂)／一八三七年刊(国)
63『古今萬國綱鑑』二十巻／新嘉坡堅夏書院藏板／一八三八年刊(国)
64『七巧新譜』二册／福文堂藏板／一八四〇年刊(国)
65『CHINESE STATE PAPERS』一册／書肆不詳／一八四〇年刊(国)
66『詞林韻釋』一册(粤雅堂叢書第十七集)／粤雅堂刊／一八五四年刊(国)
67『漢書地理志稽疑』四册(粤雅堂叢書第十七集)／粤雅堂刊／一八五四年刊(国)
68『群經音辨』二册(粤雅堂叢書第十七集)／粤雅堂刊／一八五四年刊(国)
69『刊正九經三傳沿革例』一册(粤雅堂叢書第十七集)／粤雅堂刊／一八五四年刊(国)
70『九經補韻』二册(粤雅堂叢書第十七集)／粤雅堂刊／一八五四年刊(国)
71『第五才子水滸傳』(殘本)一册／貫華堂／一八六六年刊(国)
72『古籀篇』六十二巻／説文樓藏版／一九〇二(明治三五)年刊(国)
73『學古發凡』八巻／説文樓藏版／一九一九(大正八)年刊(国)
74『宋本論語註疏』十巻／一九三〇(昭和五)年刊(国)

○［以下、刊行年不詳］

75『幼學故事尋源』十巻／文苑堂藏版（国）

76『五經讀本』十册／書肆不詳（国）

77『女孝經』一册／近聖居梓（国）

78『四書集註』五册／金閶書林刊（国）

79『四書正文』五册／福文堂刊（国）

80『論語』（殘本）／書肆不詳（国）

81『（四書白話正體）論語』（殘本）／仁德堂刊（国）

82『性理大全書』（殘本）一册／書肆不詳（国）

83『增補三字經全文』十葉／厦門文德堂藏板（国）

84『聖書』五册／馬來西亞英華書院藏板（国）

85『主經體味』（殘本）一册／書肆不詳（国）

86『遵主聖範』（殘本）一册／書肆不詳（国）

87『闢妄』一册十七頁／書肆不詳（国）

88『繡像今古奇觀』四十巻／禪山會文堂藏板（国）

89『繡像第三才子書』四巻／福文堂梓（国）

90『通鑑集要』九巻／金閶葉繼照梓行（国）

91『少微先生高明大字資治通鑑節要』（殘本）存五・六・七巻／明刊本？（聖）

92 『新刊補訂源流總龜對類大全』(殘本)存五・六・七卷／書肆不詳／明刊本？(修)

93 『類編曆法通書大全』(殘本)存十～十九卷／書肆不詳／明刊本？(修)

94 『七克』(殘本)存二之三、四之五／龐迪我著／書肆不詳(修)

95 『畸人十篇』(殘本)存下卷／利瑪竇著／書肆不詳(修)